

社 会 科

少子化について考察を深める社会科授業の開発

—第4学年「テレビと家庭・家族」の授業実践を通して—

梅 野 栄 治

A Study on Development of the Social Study Class to Deepen the Consideration to the Low Birth Rate

-Through the Practice of Class “TV and Family” in Fourth Grade Elementary Students-

Eiji Umeno

The purpose of this study is to examine how to effectively deepen the students' consideration of the low birth rate, and to clarify the achievements and problems. In this research, first the researcher considered the lesson practice which focused on the relationship between TV and Family. Second, the contents written by the students after all classes were analyzed. The achievement was that the students understood the recent tendency of individualization of family members and reduction of relationship in family. However, there is still room for improvement to clarify how to enable students to connect and understand the relationship between individualization of family members and the low birth rate which look unrelated, and how to enable students to easily understand the influence of the low birth rate. (p.76-82)

1 問題の所在と研究の目的

本研究の目的は、少子化という我が国において現在最も進行している問題に焦点を当て、第4学年における授業実践を通して、少子化について考察を深めるための効果的な指導の在り方を探り、成果と課題を明らかにすることである。少子化は解決が難しいことに加え、少子化がもたらす影響は多岐にわたる。例えば、各産業における労働力不足や、社会保障負担の増加、経済成長の鈍化などである。社会の発展には、少子化に対応した対策が必要となってくる。その対策として、人々の労働市場への参加促進や、職業能力開発等の人材育成へ注力することが挙げられる。

これまでの小学校社会科において、少子化の問題点について明らかにしてきた授業は見られる。

具体的な対応策を扱った実践は、中学校や高等学校段階で多く見られるものの、少子化に対する対応策について把握したり、考察したりするような学習は小学校社会科授業では見られない。また、少子化は本地域に生活する子どもたちには実感しにくく、見えにくい現象である。

そこで、本研究では、「家族」に着目し、子ども達にとって一番身近な電化製品であるテレビという学習材を通して少子化が生じる要因や少子化による社会への影響について迫っていく。

テレビの発展（録画の機能、デジタル化、多機能化等）により、家庭におけるテレビ視聴の仕方は変化している。近年では、家族の個人化が進み、家庭内においてもつながりが希薄化してきている。そのような家庭で育った若者は、「一人が楽」「一人が自由でいい」という考えのもと、自分の家庭

を築くことに消極的になっている。

少子化の一要因として、上に述べた要因以外にも、家族の多様化や個人化、家族機能の外部化が挙げられるが、本単元では特に、家族の個別化(家庭内での家族の個人化)に焦点化し、家族の個別化が見えてくるような学習を構成する。

2 研究の方法

(1) 対象児

広島大学附属三原小学校第4学年1組
 (男子15名 女子17名 計32名)

(2) 調査時期

平成28年11月中旬から平成28年12月中旬

(3) 研究の方略

テレビと家庭・家族の関係の変遷や、それらの要因について考えることを通して、現在の家族の個別化について実感をもってとらえることができるようにする。さらに、政府の「家族の日」の取り組みや、未婚の成人の結婚観に関するアンケート結果等から、今後更に進展すると考えられる少子化についてとらえられるようにする。

(4) 調査内容と評価方法

単元のまとめとして、単元全体を通して学んだことや考えたことをノートに記述させ、ルーブリックを作成し評価する。

(5) 授業構成

①単元名

「テレビと家庭・家族」

②単元目標

テレビと家庭・家族の関係がどのように変遷してきたのかを学習することを通して、テレビを通しての一家団らんは、「家族みんなで」するものから、「家族のメンバー一人ひとりで」するものへと変質し、それが少子化の一つの要因になっていることについて理解できるようにする。

③単元の評価規準

本単元における評価規準を表1に示す。

表1 単元の評価規準

心・意欲・態度	社会的 事象への関	テレビと家庭・家族の関係の変遷の要因について積極的に調べ、これからの家族や社会のあり方について考えようとしている。
考・判断・表現	社会的 な思	テレビと家庭・家族の関係の変遷をふまえ、これからの家族や社会のあり方等について考えている。
資料活用 の技能		さまざまな情報や資料を活用し、テレビと家庭・家族の関係を観察していくことで、家庭内での「家族の個人化」の進展をとらえている。
知識・理解	社会的 事象につい ての	家庭内の「家族の個別化」が進展したことが、少子化などの社会構造に影響を与える問題が生じている要因の一つになっていることについて理解している。

④指導計画 (全7時間)

第1次 家族について考える (2時間)

第1時 自分にとっての家族とは？

第2時 アニメから見える様々な家族形態

第2次 時代ごとのテレビの変化 (4時間)

第1時 テレビと自分との関係

第2時 テレビ普及初期 (1953年～74年)

高いテレビが冷蔵庫や洗濯機よりも早く普及したのはなぜ？

第3時 テレビ普及第二期 (1975年～84年)

「食事と会話とテレビ」が三位一体となった“テレビ的”一家団らん

第4時 テレビ普及第三期 (1985年～現在)

テレビの個別視聴と家族のつながり

第3次 テレビ視聴の変化から見えてくる社会 (1時間)

第1時 家族の個別化と少子化

(6) 授業の概要

ここでは、子ども達が、家族の在り方と、少子化について考えを深めていく第2次の第4時

と、第3次の第1時について詳しく述べる。

①第2次 第4時 テレビ普及第三期(1985年～現在) テレビの個人視聴と家族のつながり

【本時の目標】

テレビの個人視聴が増えてきている理由を考えることを通して、家庭内での家族の個別化が進んでいることに気づく。

ア 「テレビの個人視聴と家族視聴の推移」から学習課題を設定する。

まずは、テレビと家族の様子を示した写真を提示し、前回の学習を想起することができるようにした。

次に、「テレビの個人視聴と家族視聴の推移(2002年までの経年変化)」をパワーポイントを使って提示することで、「なぜ個人視聴が増えているのか?」という課題意識をもつことができるようにした。課題意識をもとに学習課題を設定したが、ここでの学習課題はあくまでも導入課題である。社会科はその教科の特性から、学習課題が導入課題と中核課題とに分けられる場合がある。中核課題は、授業を展開する上で子ども達の更なる課題意識から自然発生的に、必然的に生まれてくるものである。

イ テレビの個人視聴増加の理由を個人で考える。

個人思考の場を設定し、子ども達が自分の考えを明確にもち、次の全体交流にのぞめるようにした。

思考が困難な子どもには、考える際のヒントとなる資料を配付した。ここでの個人思考は、いわゆる「予想」の段階であるため、自分の生活経験や、既存の知識に基づき、柔軟に考えればよいことを助言した。時間も、3分程度と短時間の設定とした。

ウ 個人の考えを全体で交流し、「場を共有せず、コミュニケーションがない場合の家族の個別化」に気づく。

まずは、子ども同士の相互指名で、個人の

考え(予想)をテンポよく出させていった。子ども達からは、「自分が好きなものが見たい人が増えたから」「家庭のテレビの台数が増えたから」「一人暮らしの人が増えたから」等、こちらがある程度予想していた意見が出された。

次に、「自分の考え(予想)に説得力を生むためには、どのような資料が必要?」と問いながら、子ども達の考えを裏付ける(確かめる)資料や、新たな考えを生む資料を提示、配付した。また、配付された資料から個人視聴が増えている理由について更に読み取ることにも助言した。個人思考の段階から資料を配付するという展開も考えられるが、子ども達が必要性をもって資料と主体的なかかわりを持ち、それぞれが資料から読み取ったことや考えたことをもとに、学習を広げたり、深めたりできるようにした。資料を活用することで、新たに「家族との時間が合わなくなったから」ということに気づく子どももいた。

資料を読み取った後の全体交流で、「これまでのテレビと家族の関係と何がどう違うの?」と問うと、「昔はみんなでテレビを見ながら一緒に過ごしていたけど、今はみんなバラバラの場所で、テレビを見て過ごしている」という意見があった。この段階で子ども達の「家族団らん」の認識は、同じ場所にいて、同じことをするという形にのみ重きをおいていた。

エ 「場を共有しながらもそれぞれがバラバラの行動をする場合の家族の個別化」に気づく。

そこで、「これって家族団らんなの?」と問い、テレビを見ながら、それぞれが別々のことをしている家族の写真を提示した。

子ども達の反応は当然のように「これは家族団らんとは言えない」というものであった。「けれども、同じ場所で一緒にテレビを見ているよ。」と切り返すと、「同じ場所でテレビを見ていても一人ひとりが別のことをしていて、会話もなさそうだし、家族団らんじゃ

ないよ。」という反応であった。補足資料として、テレビ視聴時の並行行動のグラフを提示し、家族のつながり方が変化してきていることに気づくようにした。

オ 家族のつながりについて考える。

ここからは先述した中核課題の部分（家族のつながりについて再考する場）である。「そもそも家族って何だったっけ?」「家族のつながりをつくるものはテレビしかないのか?」「家族だから何もしなくてもつながりができるの?」などと問うことで、家族とのつながり方の形は様々であり、また、つながりは自然とできるもではなく、自分たちでつくるものであるということに気づくことができるようにした。

「家族そろってテレビを見ることはできないけど、休日は家族で買い物や旅行に出かけるよ。」「食事だけは家族そろって食べるようにしているよ。」「もっと家族と会話したいな。」など、具体的な意見が出された。

カ 政府の「家族の日」の取り組みについて知り、新たな課題意識をもつ。

内閣府では、子どもを家族が育み、家族を地域社会が支えることの大切さについて理解を深めてもらうために、平成19年度から11月第3日曜日を「家族の日」、その前後各1週間を「家族の週間」と定め、この期間を中

心として理解促進を図っている。

その「家族の日」の取り組みを紹介し、「家庭内の個人化は社会になにかしらの影響をあたえるのだろうか」となげかけることで、次時の学びにつながる課題意識をもつことができるようにした。

②第3次 第1時 家族の個別化と少子化

【本時の目標】

日本政府が「家族の日」や「家族週間」を定めている理由を考えることを通して、少子化という社会問題を知るとともに、家族の個人化が少子化の一つの要因になっていることを理解する。

ア テレビ視聴の変化から見える家庭や家族の変化について表にまとめる。

まずは、前時のふり返りとして、テレビの発展がもたらした、テレビ視聴の変化や家族の個人化について、表にまとめる場を設定した。ここでは、家庭の中でも「一人ひとりが自分の好きなことをしたい」「一人が楽」と考える人が増えたことを改めて押さえ、テレビなどの機械や技術の発展は人々に多くの便利さや快適さを与えてきたが、その一方で必ずしも良いことだけを人々に与えたわけではないということを押さえた。

イ 少子化という社会問題があることを知る。

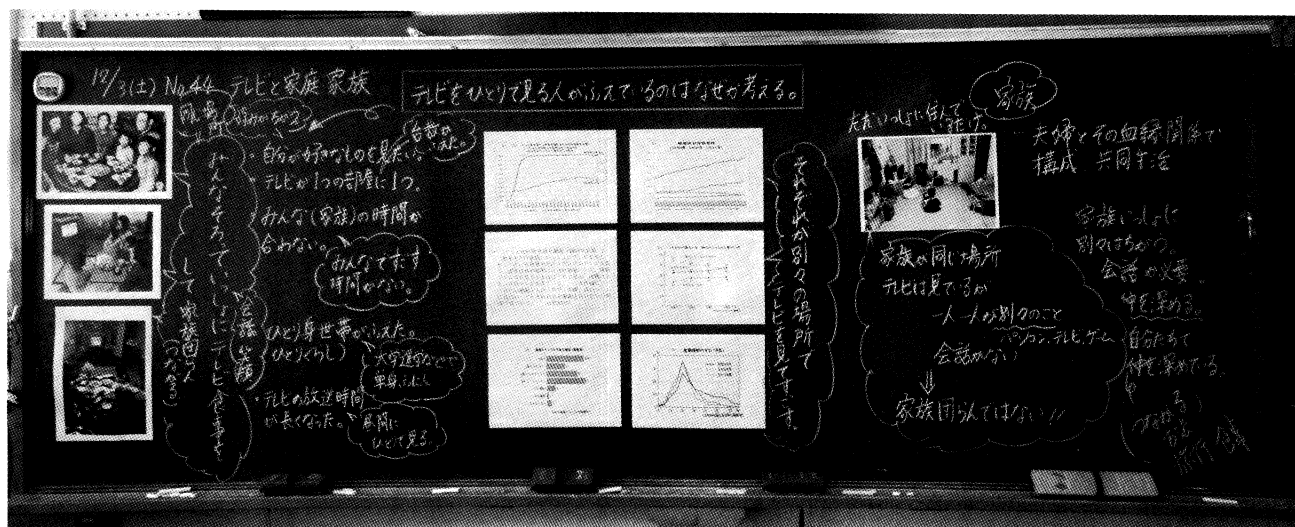


図1 第2次 第4時 テレビ普及第三期（1985年～現在）テレビの個人視聴と家族のつながり板書

家族の日のロゴマークを提示し、「なぜわざわざ政府までもが家族の大切さを訴えているのかな？家庭の中で家族がバラバラでいることで何か問題が起こるのかな？」と問いかけた。そして、まずは、家族の個人化がどのような問題を起こすのかを考える場を設定した。

ここでは、家族の個人化が進むことが、独身者の結婚離れの一つの要因となり、それが結果として少子化につながっているということ子ども達に気づいてほしいという授業者の意図があった。しかし、家族の個人化、独身者の結婚離れ、少子化という社会的事実を結びつけることは困難であると考えたため、若者の結婚離れや未婚の理由に関する記事や、出生数や出生率を示したグラフを提示し、考える材料とさせた。

子ども達は、資料をもとに、「一人が楽」「一人で好きなことをしたい」と考える人が増えたことで、結婚に積極的になれない人が増え、その結果、生まれてくる子どもの数が減るといった問題が起きているという結論を自分たちなりに導くことができた。

ウ なぜ少子化が問題なのか考える。

そこで、生まれてくる子どもの数が減っていることを少子化ということを押さえ、「少子化の何が問題なのか？少子化が進むことで国は何か困ることがあるのかな？」と新たに問い、グループで考える場を設定した。

グループで考える際は、特に資料は提示しなかったため、子ども達から様々な意見が出された。出された意見は次の通りである。

- ・このままでは、日本全体の人口が減ってしまい、国がまとまらなくなる。（まとめる人がそのうちいなくなってしまう。）
- ・生まれてくる子どもが少ないので、その分お年寄りにお金がかねなければならなくなる。お年寄りには多くのお金がかかってしまう。
- ・いろいろなことの後を継ぐ人がいなくなってしまう。
- ・将来仕事をする人が少なくなる。

これらの意見が出された後、現在の日本の人口ピラミッドを提示し、働ける若い人が減っていることを押さえた。さらに、「働く人が少なくなると国は何か困るの？」と問うと、「いろいろなものをつくったりする人がいなくなってしまうから国が発展しない。」という意見が出され、多くの子ども達は、国が成り立たなくなるということに気づくことはできた。しかし、授業者がねらっていた納税者が減り、国の収入が減ってしまうということは、国や税のしくみについて未学習の4年生の子ども達には考えることが困難であったため、授業者が補足説明をした。

エ 本時の授業と単元のまとめ

最後に、家族の個人化は少子化という社会問題のあくまでも一つの要因であること、そ

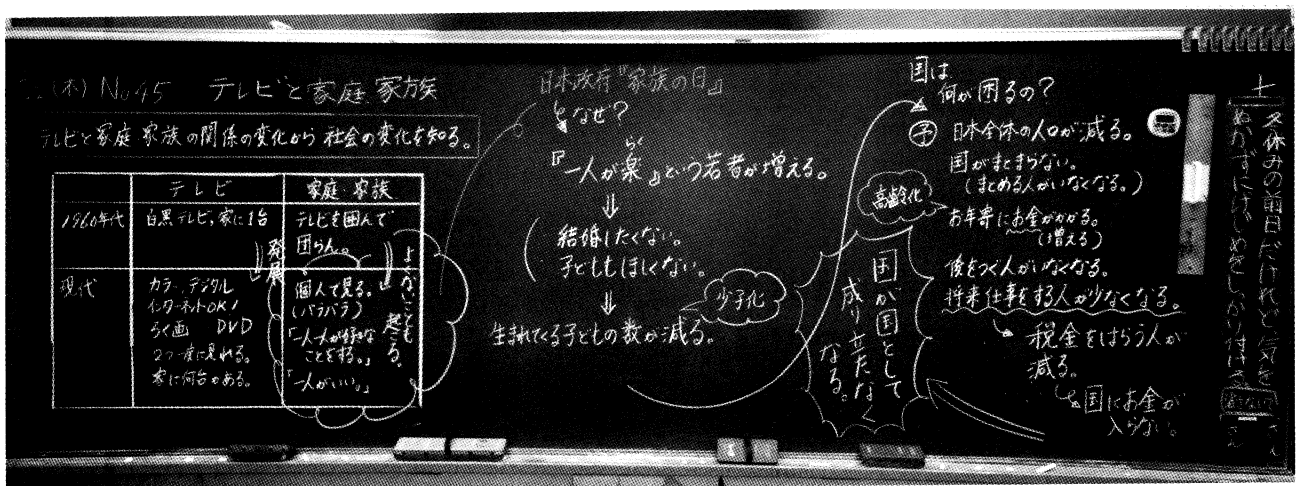


図2 第3次 第1時 家族の個別化と少子化板書

他にも様々な要因があることを確認した。また、「結婚しない」という考えは必ずしも悪いことではなく、結婚の選択は個人の自由であり、未婚も尊重されるべき生き方であることを共通認識させ、本時の学習を終えた。

3 結果と考察

ルーブリックを活用して単元末に子ども達が記述したものを評価した。活用したルーブリックは表2に示したものである。

表2 パフォーマンス課題とルーブリック

【パフォーマンス課題】	
「テレビと家庭・家族」の学習を通して学んだことや考えたことを書きましょう。	
【評価基準】	
テレビと家庭・家族の関係の変遷をふまえ、これからの家族や社会の在り方等について考えている。	
段階	【評価基準】
IV	テレビと家庭・家族の関係の変遷をふまえ、これからの家族や社会、自分自身の在り方等について記述している。
III	テレビと家庭・家族の関係の変遷をふまえ、これからの家族や社会の在り方等について記述している。
II	テレビと家庭・家族の関係の変遷についてのみ記述している。
I	学習の感想のみ記述している。

図3は、単元末記述の段階別の人数を示したものである。

最も多かったのは、第III段階の子どもで14名であった。次に多かったのは、第II段階の子どもで10名であった。第I段階、第IV段階の子どもは4名ずつであった。

それぞれの段階の記述の例を次に示す。

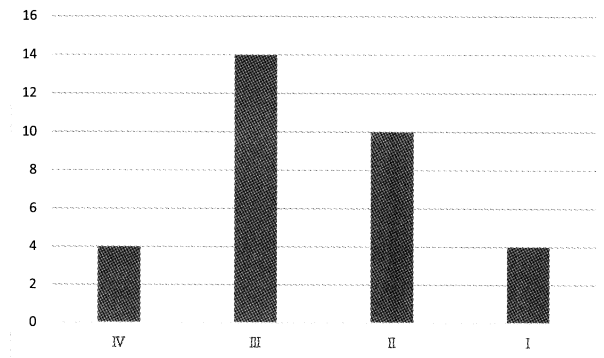


図3 単元末記述の段階別人数

<第IV段階>

少子化問題を解決するために、政府はもっと家族の大切さを呼びかけていかなければならないと思います。また、政府だけにたよらず、私たち一人ひとりが家族の大切さを見つめ直し、家族や他の人とのつながりも大切にできる社会をつくっていきたいです。

家族のつながりが弱くなっている今の社会ではいけないと思います。これからは、家族と一緒に過ごす時間を大切にして、できるだけ会話をしたいと思います。

<第III段階>

家族だけではなく、人と人とのつながりを大切にできるような社会になれば、少子化問題も解決できるのではないかと思います。

これまでは、家族団らんの中心はテレビだったけど、これからは、テレビだけでなく、それぞれの家族に合った方法で、家族団らんできればいいと思います。

<第II段階>

昔はテレビを通して家族団らんをしていたのに、今は、テレビが家に何台もあるから、テレビをバラバラになって見る家族が増えてきていることが分かりました。

同じ部屋にいて、テレビをつけているのに、それぞれが別々のことをしている（例えばゲームやスマホなど）家族が増えてきていることが分かりました。

<第I段階>

テレビと家族の関係や少子化問題について学習することができました。

記述の質的傾向と記述内容から、テレビの発展により、家庭におけるテレビ視聴の仕方は変化し、近年は、家族の個人化が進み、家庭内におけるつながりが希薄化してきていることは多くの子どもが捉えることができたと考えられる。これは、テレビという学習材が子ども達に身近なものであるがゆえに、テレビ視聴の変化を通して家庭・家族の様相の変化を捉えることが比較的容易であったためであると考えられる。

また、単元の学習を通して、現代の家族や社会に課題意識をもった子どもが多かったため、これからの家族や社会の在り方について自分なりに考え記述した子どもが多くいたと考えられる。

その一方で、家族のつながりの希薄化が少子化の一要因となっていることや、少子化が社会に与える影響等について、子ども達は十分に理解することができなかつたと考えられる。これは、第4学年の子ども達にとって少子化という社会問題は十分に理解することは困難であるということが理由の一つとして考えられる。また、単元の最終時に学習した少子化という社会問題よりも、それまで時間をかけて学習してきた家族のつながりや、家族の在り方についての学習が子ども達の印象に残ったということも理由の一つとして考えられる。

4 結論と今後の課題

本研究を通して、子ども達は、少子化について自分なりに考察することはできていたが、それらの考察を更に深めることができたのかという点においては疑問が残る。しかし、現代の家族や社会の在り方に何の課題意識ももっていなかった子ども達にとっては、現代の家族や社会の在り方の課題に気づき、家族や社会はどうあるべきなのかを自分なりに考える機会をもつことができたということ自体は大変有意義なことであったと考えられる。

本研究では、現代社会の少子化について考察を深めるために、「家族」に着目し、子ども達にとって一番身近な電化製品であるテレビという学習材を通して少子化が生じる要因や少子化による社会への影響について迫った。家族の個人化と少子化という一見すると無関係のようにも見える2つの事象を第4学年の子ども達が理解できるようにいかに結びつけるのか、また少子化の社会への影響をいかに分かりやすく捉えさせていくのかは今後の課題である。

少子化は、子ども達にとって実感しにくい社会問題であるとともに、解決困難な問題である。だからといって、少子化について考えることは避けて通ることはできない。10年後、20年後更に少子化が進んでいるであろう社会を背負って立つのは他ならぬ子ども達である。だからこそ、少子化について見える化を図り、問題意識を小学校段階からもつことは、将来の自分たちにかかわる問題としてとらえさせるためにも、将来少子化を解決していかなければならない公民的資質をもった人間を育てていくためにも重要である。

<参考文献>

本論文を執筆するにあたり、参考にした文献は次の通りである。

- 1) 山田昌弘：「迷走する家族」，有斐閣，2005.
- 2) 目黒依子：「個人化する家族」，勁草書房，1987.
- 3) 松信ひろみ：「近代家族のゆらぎと新しい家族のかたち」，八千代出版，2016.
- 4) 井田美恵子：「テレビと家族の50年」，NHK放送文化研究所年報 2004，pp. 111-130，2004.
- 5) 木村義子：「メディア観の変化と“カスタマイズ視聴” “つながり視聴”」，NHK放送文化研究所年報 2013，2013.